であり、それ以後に違いないが、記録にある最初の帯出の年月日は「安政三年辰五月八日　杉田雍助節用集」である。また購入の最後は「文久元年酉六月」である。これからみて安政年間（一八五四～六〇）から文久一年（一八六一）に購入されたものと想定される。目録は、(1)発行年、(2)著者、(3)原本の題名、(4)本の種別の順で記録されている。

購入された本の発刊年を見ると、一七〇〇年代は、一七六八年の馬医書と一七八二年刊の内外書の二部である。他は一八一〇年代一部、一八二〇年代が二部、一八三〇年代が一二部、一八四〇年代が一五部、一八五〇年代が三七部である。全六九部のうち三七部が五〇年代のものであった。

しかし、そのうち邦訳されるなど、広く一般に活用されたものは、セバスチアーンの生理学書、オンセノールドの眼科書ならびに外科書、フーフェランドの内科書、フレスの解剖書と限られている。だが、それ以外の本にも帯出者の記録をみる。以上の他、佐賀藩が購入した蘭書の内容一覧を提示する。

（順天堂大学医学部医史学研究室）

海上随鷗の在坂期間再考

中山　沃

海上随鷗（一七五九～一八一一）は文化三年（一八〇六）に江戸から京都に来て蘭学塾を開いた。この年の五月に小森桃塢と藤林普山はこの塾に入門した。しかしやがてどのような理由があったか不明であるが、大坂に移った。随鷗と同郷（鳥取）の歌人香川景樹（一七六八～一八四三）の日記によって文化四年（一八〇七）十月初旬から文化五年五月九日まで在坂していたことは明らかである。その後再び京都に帰り、文化八年（一八一一）正月十六日、五十四歳で死去した。京都へ帰った年月も明らかでない。

私は次の二つの資料によって、随鷗は少なくとも文化三年（一八〇六）十一月から文化六年十一月まで在坂していたと推量する。

一　武元君立（一七七〇～一八二〇）の遺著『北林遺

稿』

君立は武元登々庵（一七六七～一八一八）の弟であり、その詩文集『北林遺稿』の文化丁卯（四年）詩稿に「春初寄懐登登兄于大坂」と題し、その註に「兄自客冬寓于大坂、従海上随鷗者学蘭語、今春旭域社友欲待兄帰為書畫展観会、故前詩并及」と記し、次の二つの詩を掲げている。

山中我尚旧巣鳩、海上君今新狎鷗、聚首飛鳴何処好、旭川春水米家舟

池塘春草夢魂通、遥憶浪華詩興同、江上梅花看畫後、帰飄一片挂東風

この詩文から、登々庵は文化三年冬から大坂に居を定め、海上随鷗にしたがってオランダ語を学んだことを知ることができる。そして文化四年の春、岡山の社友達は、登々庵が、岡山へ帰るのを待って、書畫展観会を開くことを希望していることがわかる。

一方随鷗の門人録『社盟録』によれば文化三年十一月、随鷗に入門している。以上のことから登々庵は大坂で入門したと考えるのが妥当と考えられる。

二　備前藩医佐治玄圃（碩庵）の奉公書

玄圃の自筆の奉公書に「文化五戊辰年四月朔日（註、玄圃四十二歳）奉願候而医業為修行、大坂表へ罷越、海上随鷗方に寄宿仕居申候」と書かれ、続いて「同六巳己年十一月二十六日大坂表より罷帰申候」とあり、次に「同年十一月二十六日御隠居様来春御祝年ニ付、於酒折宮仲間一統之御祈祷申上候、私儀行年四拾三歳ニ罷成申候、佐治玄圃黒印、花押、文化六巳己十二月二十九日」と終っている。玄圃は、修業する年令としては四十二歳という、蘭方医学を学ぶには比較的高年であった。家族を伴った願書も出しておらず、単身で随鷗の塾に文化四年四月から文化六年十一月末まで二年十か月間住み込んだものと考えられる。退塾したのは随鷗が京都へ帰ることが原因であったのかもしれない。

以上のことから、随鷗は、文化三年十一月から文化六年十一月の少なくとも三年間は在坂したと推定できる。このように考えると、宗田一氏が紹介した随鷗の「文化五年十一月」の男性二体の解屍は京都ではなく大坂で行われることになる。

文政四年（一八二一）十二月十六日、小森桃塢一門が京都西刑場で行った解屍の記録である、桃塢門人の池田冬蔵著『解臓図賦』の中の冬蔵の序事の記述が、前述の文化五年十一月の解屍と矛盾なく理解できる。

序事に「先是随鷗先生首唱西洋之学、和蘭医流始旺于京師、末年有志於解屍徴実之挙、不果而没、故允其大祥忌、吾師桃塢小森先生普山藤林氏及同門許多人相議而挙事、令大橋道塢等執刀、遂終其志、于時文化九年壬申冬云々」。文化五年（一八〇八）十一月の解屍が大坂で行われたから、小森と池田がこの『解臓図賦』でまったく触れていないのを理解できる。山本四郎氏の「小森や池田がこの文化五年十一月の解剖にふれず、先師の遺志をついで解剖したとあるのは奇異に感ぜられる」という疑問、および宗田氏の疑問も氷解できると考えられる。小森も藤林も文化五年十一月には京都におり、大坂の解屍に参加しなかったのであり、随鷗は京都の門人とともに、京師の地で解剖を行いたかったことをもらしていたと考えられる。この文化五年（一八〇八）には、大坂では間重富（一七五六～一八一六）、橋本宗吉（一七六三～一八三七、芝蘭堂の四天王の一人）、伏屋素狄（一七四七～一八一一）、二代目大谷尚斎（一七六五～一八二六）、斎藤方策（一七七一～一八四九）、各務文献（一七五五～一八一九）、藤田顕蔵（一七七〇～一八二九）、野呂天然（一七六四～一八三四）と多士済々で、これらの人々が集まったものと思われる。この解屍状景のスケッチは五八人の人物を描いている。なかなかの盛況であったことがうかがえる。

（岡山大学医学部）